

中 学 校

平 成 9 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

音 楽

東 京 都 教 育 委 員 会

平成9年度

教 育 研 究 員 名 簿 (音楽)

区市町村名	学 校 名	氏 名
江 東 区	江東区立第四砂町中学校	◎ 佐 藤 隆 弘
大 田 区	大田区立志茂田中学校	武 者 裕 子
世 田 谷 区	世田谷区立八幡中学校	鹿 江 美一子
渋谷区	渋谷区立鉢山中学校	森 山 亮 二
足 立 区	足立区立上沼田中学校	野 上 文 子
江戸川区	江戸川区立小岩第三中学校	加 藤 ふくみ
八王子市	八王子市立宮上中学校	畑 野 茂 実
青 梅 市	青梅市立泉中学校	玉 田 宏 美
小 平 市	小平市立小平第一中学校	加登谷 博 之
東久留米市	東久留米市立久留米中学校	○ 関 谷 由美子

◎ 世話人 ○ 副世話人

担当 指導部中学校教育指導課指導主事 根 岸 順 一

目 次

I	主題設定の理由	1
II	研究の構想図	1
III	研究の内容	
1	理論研究	
(1)	音楽科における感動について	3
(2)	やわらかな感性について	3
(3)	授業改善の視点について	4
(4)	研究仮説の設定について	4
2	調査研究	
(1)	アンケート調査からとらえた生徒の実態	5
(2)	仮説検証のための視点	7
3	授業研究	
	指導事例Ⅰ「作曲者の想いや歌詞の意味を理解し、表現しよう」	8ー1
	指導事例Ⅱ「一人一人が精一杯歌い、豊かな混声合唱の響きをつくろう」	12 2
	指導事例Ⅲ「自分たちで作る喜びを味わうアンサンブル」	16 /
	指導事例Ⅳ「楽曲に関する知識や理解を深め、感動的な鑑賞をしよう」	20 2
IV	研究のまとめと今後の課題	
1	研究のまとめ	24
2	今後の課題	24

I 主題設定の理由

今日、私たちが生活している社会は、物が豊富で、しかも様々な情報が満ちあふれており、手に入れたと思えば、必要な物や情報をたやすく手に入れることができる。しかし、その反面、家族や友人とのかかわり方が次第に疎遠になり、他人を思いやる心が希薄になってしまい、現代人の心はすさんできていると言われている。

そんな時代だからこそ、これから21世紀をたくましく生きる子どもたちを育成するためには、私たち大人がもっといろいろな体験をする機会を子どもたちに与えて、感性を育てなければならない。幅広く受入れられるような広い視野をもつ心、すなわち、柔らかな感性をもった子どもたちを育てることが極めて重要であると考えた。

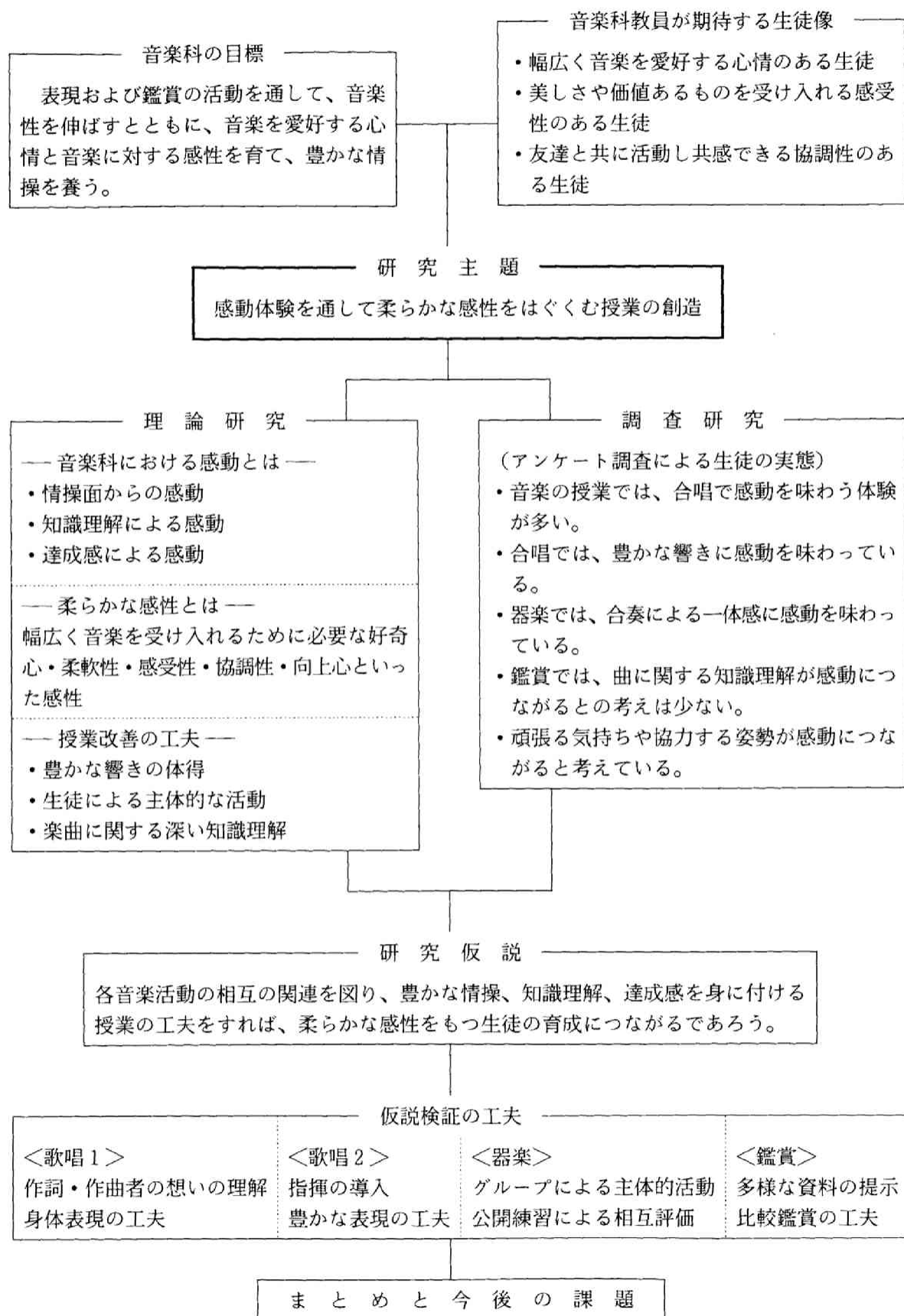
現代は、テレビ、パソコン、ゲームなどで、子どもが一人で画面に向かうような様子が多く見られる。自らは体験していなくても、さも自分が実際に体験しているかのような錯覚を起こす場合もある。みんなで創る、仲間と共感するなど、友人と共に共通する感動体験が少なくなっている。また、音楽についても、現代はテレビやラジオのスイッチを入れれば激しい踊りを伴った歌手の歌声が聞こえてくる時代である。子どもたちは、「この歌は好き」「気に入った」「すぐ覚えられる」「格好がいい」などと感じたり、CDやビデオを買い求めたりして、流行する歌の世界に自然に入っている。また、自分が音楽に感動するというよりも、軽い気持ちやあこがれから音楽が好きになっている子どもたちも多いようである。

このような状況の中で、現在の中学生は育ってきているが、それでも入学時に上級生の歌声を聴いた時など、「大人の男子の声を聴いて感動した」という感想を口にすることがある。まだ変声期を終えていない時期ということもあるが、「早くあのように歌ってみたい」「小学生の時には味わえなかった大人の歌声を自分たちも体験したい」という気持ちを訴えているのである。また、教育機器の活用の一つとして、LDで映像を付けた鑑賞授業を行ってみると、楽器の演奏の仕方に見入る生徒や、音の違いが分かったと言って得意顔の生徒がいるなど、音楽に対する興味・関心を強く抱いている生徒が多数いることが分かる。“音楽”という教科は、生徒の心を動かすことのできる機会の多い教科である。生徒に、音楽による様々な体験を通して深い感動を味わわせたいと、音楽科の教師は強く思っている。

さらに、音楽の授業においては、教師が常に心に置いておきたいと思っていることとして、生徒がハーモニーの美しさを味わったり友人と感動を共有したりする情操面、曲や作曲者などについての知識を深めたりする理解面、何回も練習を繰り返し徐々に作り上げ完成されていくときに抱く達成感の三つが挙げられる。

そこで今年度は、「感動体験を通して柔らかな感性をはぐくむ授業の創造」という主題を設定し、生徒たちの体験的な活動の一層の充実を図りつつ、生徒の柔らかな感性をはぐくもうと考えた。

Ⅱ 研究の構想図



Ⅲ 研究の内容

1 理論研究

(1) 音楽科における感動について

感動とは、「心を強く揺さぶられたり、深くものに感じて心を動かすこと」である。音楽の授業において、生徒一人一人を「感動」させるための条件については次の3つの視点からとらえることとした。

① 情操面を豊かにすること

それぞれの人間が育ってきた環境により、何に感動をするかが多少違うことはあっても、一人一人の感じる部分を更に伸ばし、深めることは重要である。優れた演奏、美しいハーモニー、豊かな響きに触れることで、人は感動する。さらに美しく、よい音を出すために、生徒の主体的な音楽表現を積極的に取り入れることが、情操面を豊かにしていくことにつながる。

② 知識理解を深めること

鑑賞で最も大切なこととして、曲の時代背景を知ることや、作曲者についての理解、曲の構造形式などについての理解が挙げられる。この知識理解によって曲への深い味わいが感動として生まれてくる。合唱においても、歌詞の読み込みをすることにより作詞・作曲者の思いを理解し、更に深い表現が生まれてくると考えた。

③ 達成感を味わうこと

協力して成し遂げた満足感や、気持ちの共有・達成感は、更に音楽を深めさせる大きな原動力になる。合唱、合奏をしたときの一体感、そろった時の満足感・成就感、そして、鑑賞においては、すばらしい演奏を大勢で一緒に聴くことにより、その場での息をもつかせぬ感動の共有を味わうことがある。

このような視点に基づき感動体験をより多くもたせることにより、「個」や「集団」がそれぞれにおいて質的に変容するようになると考えた。

(2) 柔らかな感性について

本分科会では音楽科が育てようとしている感性を、「生徒が自分の気持ちや心の動きをお互いに受けとめ合ったり、音楽的な充実感を味わったりすることにより、身近なことや小さなことも発見する、感じる、つくる喜びを味わうこと」と定義付けた。幅広く音楽を受け入れるために必要な好奇心や柔軟性・感受性・協調性・向上心といったものが、生徒一人一人「生きる力」としての豊かな感性をはぐくむうえでの大きな土台となる。このより柔軟な「柔らかな感性」は、様々な体験をすることや感動場面を多く体験することで育つことを踏まえ、「柔らかな感性」を育てる姿勢が、豊かな人間性を形成するための基盤をなすものだと考えた。

(3) 授業改善の視点について

視 点		授 業 改 善 に む け た 具 体 的 な 工 夫		
		歌 唱	器 楽	鑑 賞
情 操	感動 体験	豊かな響きを作る 美しいハーモニーを味わう 強弱・テンポなどの 表現の工夫	豊かな響きを作る (多人数の合奏) ピッチの統一 いろいろな種類の合奏	優れた演奏に触れる喜び 美しい演奏を味わう 本物志向
	工夫・ 改善	アカペラの導入 発声・呼吸法の工夫 身体表現によるイメージ活動 指揮者による主体的な 音楽表現	音合わせ 呼吸法 演奏法の指導	比較鑑賞の工夫 LDの充実 AV機器の開発
理 解	感動 体験	歌詞の理解 歌詞の読み込み 作詞・作曲者の思いの理解 発声の響きを知る	ピッチの理解 楽器本来の音色の追求 読譜力の向上 楽器の奏法・構造の理解 未知の楽器に触れた喜び	曲の時代背景を知る 作曲者についての理解 曲の構造・形式・編成に ついての理解
	工夫・ 改善	教材内容の熟知 詩の朗読 発音(声)指導	演奏技術をふまえた 編曲の工夫 LD・CDの活用 (模範演奏) 本物の演奏・実物の提示 実態に応じた 効果的な編成の工夫	LD・CDの活用 写真資料の厳選 多様な資料の提示
達 成 感	感動 体験	生徒による指揮の導入 合唱における生徒の 主体的な取組み パートリーダーの導入 歌い上げる喜び	合奏をしたときの一体感 合奏で揃ったときの満足感 や成就感による喜び	感動の共有 知識理解による感動の体験
	工夫・ 改善	指揮者(伴奏者)の経験 パートリーダーの導入 1時間の授業における 内容の充実 グループ活動の能率化 発表の機会の提供	パートリーダー・ 楽器リーダーの育成 グループ学習と 全体合奏の充実 発表の機会の提供	課題学習の挿入 (レポートの提出) 他の曲に興味・関心を 広げる観点の指摘

(4) 研究仮説の設定について

上記の授業改善の視点にせまるために次のような研究仮説を設定した。

“各音楽活動の相互の関連を図り、豊かな情操、知識理解、達成感を身に付ける授業の工夫をすれば、柔らかな感性をもつ生徒の育成につながるであろう”

2 調査研究

(1) アンケート調査からとらえた生徒の実態

授業研究に向けた検証の視点をとらえるために、東京都内の公立中学校10校に対して、15項目の「『感動体験』についてのアンケート」調査を実施した。

- ・調査期日 平成9年6月から7月
- ・調査対象人数 728人（1年生271人、2年生236人、3年生221人）

以下に示した4項目は、いずれも複数回答可である。

項目7 音楽の授業の中で、『感動』したことがあるのはどんなジャンルの時ですか。

① 歌（合唱）をやった時	318人
② 曲を鑑賞した時	218人
③ 楽器を演奏した時	147人
④ 日本の音楽に触れた時	61人
⑤ 指揮法の勉強をしている時	31人
⑥ 西洋音楽史や有名な音楽家について学んでいる時	25人
⑦ 楽典の勉強をしている時	3人
その他	17人

【考察】 合唱・合奏・鑑賞などの、音を通した活動に感動を味わっている。

しかし、日本音楽や知識理解に関する活動からは、感動を得る生徒が少ない。

このことから、共同体験を通して感動体験を味わわせたり、知識理解の面から感動を味わわせたりするための指導の工夫をすることが必要である。

項目8 音楽の合唱の授業の中で、『感動』した時はいつですか。

① 全員の声が豊かに音楽室に響いた時	294人
② ハーモニーが綺麗に響いた時	258人
③ 他のパートの声が響き、聴こえた時	120人
④ 詩を感じて歌った時	108人
⑤ 指揮者が一生懸命に指揮をしてくれた時	55人
その他	21人

【考察】 豊かな響きやハーモニーの美しさに感動を味わっているが、詩の内容の理解にともなった感動を味わう生徒は比較的少ない。

このことから、感動をより深めさせるためには詩の内容を理解させたり、表現の工夫をさせたりすることが必要である。

— 項目9 音楽の器楽の授業の中で『感動』した時はいつですか。 —

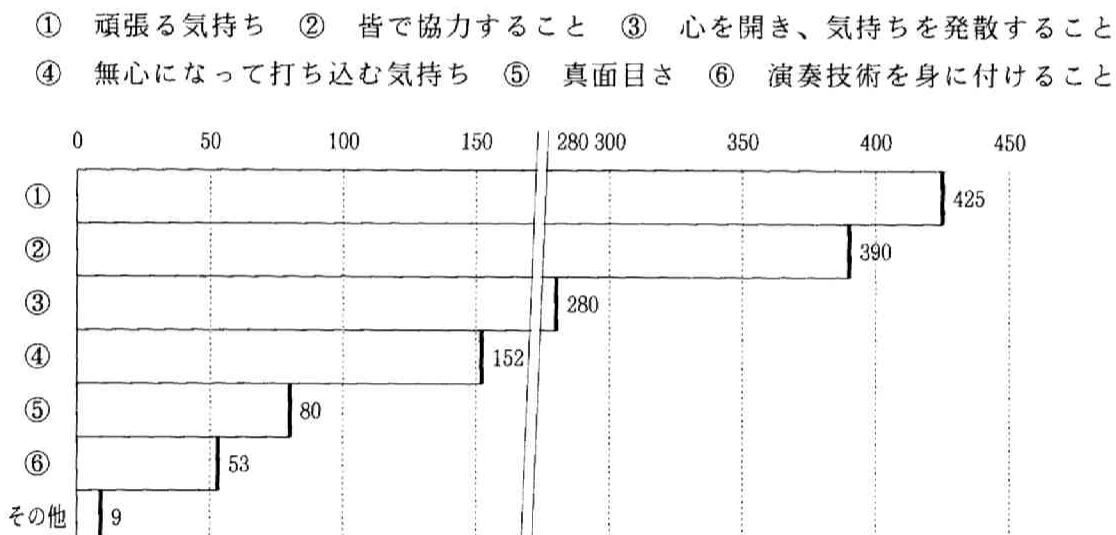
① 合奏でみんながそろった時	176人
② アルトリコーダーが吹けた時	81人
③ リコーダーアンサンブルをした時	55人
④ ハンドベルが綺麗に響いた時	54人
⑤ ギターが弾けた時	37人
⑥ ドラムでリズムが叩けた時	37人
⑦ 箏が奏でられた時	36人
その他	30人

【考察】 みんながそろったときや、実際に楽器を手にして練習・演奏をした時に感動を味わっている。

このことからグループ活動による主体的活動を通して一人一人の演奏技術をより高め、協力して豊かな響きを作り上げることで感動体験を味わわせる必要がある。

— 項目13 『感動』を体験するには、何が必要だと思いますか。 —

A 表現活動について

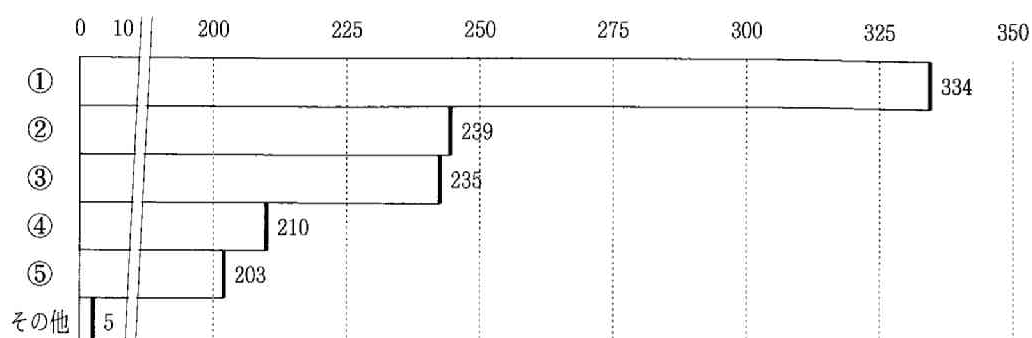


【考察】 「頑張る」「皆で協力」との回答が、「気持ちを発散」「無心」という回答をかなり上回っている。

このことから生徒は、感動を得るためには、自己の気持ちも大切だが、それ以上に、自分以外の仲間と協力し、頑張る気持ちが『感動』につながると考えているが、演奏技術をバランスよく身に付けさせることも必要である。

B 鑑賞活動について

- ① 集中すること ② 耳を傾けること ③ 曲のもってるよさを味わって聴く
④ 曲を理解すること ⑤ 知らない曲も関心をもって聴くこと



【考察】 「集中して聴く」ことが感動に結び付くとする回答が多いが、曲を理解して聴くことの大切さを感じていない生徒が少ない。

このことから曲の構造や作曲者自身について理解する学習活動を取り入れる必要がある。

(2) 仮説検証のための視点

生徒が味わった感動体験に関する質問項目に対して圧倒的に多かったのは「映画を見たとき」と「テレビを見たとき」の回答を合わせた771人である。また、「その他」と回答した生徒の中で、「テレビゲームで最後までいった（クリアした）とき」などの意見を示した生徒が、どの学年にも7人程度いた。この結果から、今の生徒が感じる『感動』とは、多分に疑似体験の中から得ている場合が多いと考えられる。このことから、自分自身が努力をして得る感動を知らない生徒、また自分自身が努力をしてまでわざわざ感動を得なくても構わない、と考える生徒が増えているという、あまり好ましいとはいえない生徒像が浮かんでくる。

しかし、一方では、次のような生徒の生の声があった。

「陸上競技大会のムカデ競争で、3位になった時、くやしくて涙が出た。でも悔いはのこらなかった。みんな頑張った。みんなが一つになれた気がした。そのとき、なんか、悔し泣きではない涙が出た。」「合唱コンクール、陸上競技大会、私はまだ1回も優勝したことがありません。でも、2年の合唱コンクールで指揮をやった時、当日のみんなのヤル気あふれる『瞳』にとっても感動しました。」このことから、今の生徒は、皆で協力しあう活動により得られる感動を求めていると考えられる。

協力や協調を通して得られる感動を求めているながらも、幼児期からの社会の変化にともない、疑似体験の中で感動を味わっている生徒が多い。音楽という教科は、今の生徒たちの求める真の感動を味わわせる可能性を極めて多くもっていることが、アンケート結果から導き出される一つの結論である。どのような工夫をすれば、音楽という教科の特性をより効果的に発揮させることができるか、仮説検証のための視点をアンケート結果から導き出した。

3 授業研究

指導事例Ⅰ 歌唱「作曲者の想いや歌詞の意味を理解し、表現しよう」第1学年

1 題材設定の理由

現代の殺伐とした社会の中で、最近の中学生は心を揺さぶられるような体験をしたり、美しいものや素晴らしいものにふれ感動したりする機会が少なくなっている。それゆえに音楽科の教師は柔軟な心を持ち、成長期にある子どもたちと少しでも多くの感動体験を共有していく必要がある。そのためには、生徒が主体的に活動（自ら表現する）し、一生懸命に演奏することによって生まれる喜び、できたという充実感、満足感を味わうことができる場面を作ることが必要になってくる。この経験を重ねることによって、柔らかな感性が育つものと考え、本題材を設定した。

2 指導目標

- (1) 合唱活動を通して、一人一人が一生懸命に歌い、自ら表現する楽しさを味わわせる。
- (2) 作詞・作曲者の想いを理解し、感情を込めて歌わせ、合唱することの喜びを味わわせる。

3 指導計画（全4時間扱い）

第1時の学習内容

- ・CDを鑑賞し、曲のイメージをつかむ。
- ・パート練習をする。（教師による音取りとそれぞれのパートのグループ活動を通して自分のパートの音程をしっかりとる）

第2時の学習内容

- ・パート練習をし、自分のパートを自信をもって歌えるようにする。
- ・全体で合わせ、ハーモニーを把握する。



第3時の学習内容（本時の展開例）

- ・楽譜上の諸要素を理解させ、身体表現を取り入れ、表現の工夫をさせる。
- ・作詞、作曲者の想いや、歌詞の内容を理解し、気持ちを込めて合唱する。
- ・曲のイメージに合った表現の方法を工夫させる。

第4時の学習内容

- ・曲全体の流れを感じ取り、主体的に表現を工夫させ、合唱を完成させる。
- ・合唱表現の楽しさを味わわせる。

4 評価の観点

- ・自主的にパート練習に取り組むことができたか。
- ・楽譜上の諸要素を理解することができたか。
- ・一人一人が意欲的に歌うことができたか。
- ・歌詞の内容や作詞・作曲者の想いを理解し、表情豊かに合唱することができたか。
- ・身体表現を取り入れながら、表現を工夫することができたか。

5 仮説検証の視点

- ① 作詞・作曲者の想いの理解⇒作者のメッセージ（曲に対する想い、作曲の経緯）を聴き合唱に生かさせる。
- ② 身体表現の工夫⇒身体表現を取り入れながら曲のイメージをつかませる。

6 本時の展開（第3時の指導事例）

※○数字は、仮説検証の視点に対応

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1. 歌うことへの準備・意欲を高める。 ・ストレッチをする（首・肩・腕・顔） ・腹筋をする ・既習曲『夏の日のお祭り』を伸び伸びと歌う ・既習曲『ぼくらの世界』を元気よく歌う 評価 一人一人が伸び伸びと歌うことができたか。	・一人一人を見て必要に応じて助言する。 ・腹部を意識させ、腹筋運動をさせる。 ・発声練習を兼ねてしっかりと声を出させる。 ・リズムにのって歌わせる。
2. 本時の学習曲『マイバラード』を合唱する。 3. 今日の目標を確認する。 ・作詞・作曲者の想いや歌詞の内容を理解し、気持ちを込めて合唱しよう ・一人一人が身体を使いながら、表現の工夫をしよう 4. 『マイバラード』の楽譜を見る。 ①作者の想いが書かれている部分を探す 5. 作者のメッセージのテープを聴く。 ①作詞・作曲者の想いの理解	・正確な音程とリズムで歌えているか注意させる。 ・前時までに学習したことを生かして歌っているか注意させる。 ・1時間の授業の中で学習すること（目標）を生徒全員に意識付けさせる。 ・生徒に発表させる。 ・一つ一つ確認させる。 ・感想を発表させる。

評価 作詞・作曲者の想いを感じながら聴いているか。	
6. 出だしの部分の歌い込みをする。 ②表現の工夫	・出だしのブレスをそろえさせる。 ・語りかけるように歌うにはどうしたらいいか生徒自身を考えさせ、発表させる。 ・何通りか実際に歌ってみて自分たちの納得のいく歌い方を見付ける。
7. 「～はずかしがらず歌おうよ」まで歌う。	
8. 「心もえる～」の歌い込みをする。	・リズムを感じて歌えるように身体を使って歌わせる。(男子中心に歌わせる)
9. 「きらめけ～」の歌い込みをする。	・女子中心に身体を使って表現の工夫をさせる。
評価 男女の互いのパートを聴きあい、表現に変化が見られたか。	
10. Coda の部分の歌い込みをする。	・ molt rit. Lento の記号を確認させる。
11. 「マイバラード」を通して合唱する。	・ 今日学習したことを振り返り、確認させる。 ・ 教師自身が表情豊かに指揮をする。
評価 ・ 表現の工夫をしながら表情豊かに合唱できたか。 ・ 一人一人が一生懸命に歌えたか。	
12. 自己評価カードに記入する。	・ 点検し、次回の活動に向けて目標をつかめるように助言する。
13. 成果を確かめる。	・ 本時の評価、反省を話し、次時の予告をする。

7 歌唱指導における評価の工夫例

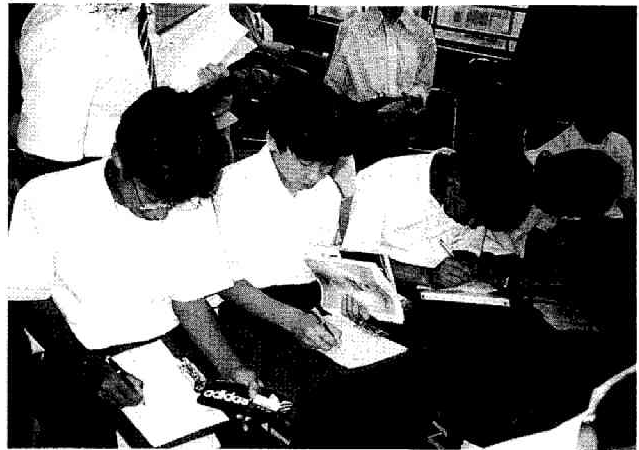
自己評価カードを取り入れることにより、毎時間の生徒の学習活動の様子や達成度のある程度把握することができる。また、生徒自身も次の授業への達成しようとする意欲や目標が明確になり、具体的な活動内容を理解できるようになる。

一方、教師は自己評価カードを活用しながら、個々の生徒に応じた声かけや助言をし、次への段階に結び付くようにするなどして、必ず生徒に還元することが大切である。

また、この自己評価カードのように最後にまとめて評価するだけでなく、授業の途中で個々の生徒の状況に応じて的確に意欲を起こさせるような助言や評価をすることが必要である。

このような工夫により、生徒一人一人の授業に対する姿勢が主体的になり、目標をもって取り組むようになってきた。

今回は、共通の観点を生徒に示してあるが、生徒自身がそれぞれに応じた努力目標としての観点を作らせることも大切である。



自己評価カード（合唱）
—今日の活動を自己評価してみよう—

＜記入方法＞

◎ とてもよくできた ○ できた ♪
△ もう少しできそう
× 全然できなかった 頑張ろう!! ♪

観 点	月 日	8/8	8/9	8/16	8/23	8/29
一生懸命取り組めたか		◎	◎	◎	◎	◎
ストレッチをしっかりできたか			△	○	◎	
膝筋を使って歌えたか		△	△	△	○	◎
口の開け方に注意して歌えたか		○	○	○	○	○
リズムは正確だったか		○	△	△	△	○
音程に気をつけて歌えたか		○	△	△	△	○
発音に気をつけて歌えたか		○	○	○	○	○
強弱等の記号に気をつけて歌えたか		△	○	○	◎	△
歌詞の意味を理解して歌えたか		◎	○	○	◎	○
他のパートと聴き合っていたか		△	○	○	○	○
感情を込めて表情豊かに歌えたか		○	○	○	○	○

◎かっこいいといふ、かんは、て!!

1年 〇組 〇 氏名

8 考 察

2つの仮説検証の視点にたってみると、①教材の作詞、作曲者のメッセージを、直接生徒に聞かせることで、生徒は真剣にメッセージを身体全体で受け止めるかのように聞いていた。メッセージを聞く前と聞いた後ではその曲に対する生徒自身の思い入れが格段に強くなった。

教師がひとつの題材を生徒に提示する時に、作詞や作曲された経緯、そして、その作詞者、作曲者がどのような気持ちで演奏してほしいのかを下調べしたり、資料を準備したりするなど、教師自身が曲を的確に解釈できる力を身に付けることが大切である。その上で、生徒自身に考えさせ、演奏に生かせるようにすることが、ただ楽譜通りに歌うだけではなく、音楽的により深まった演奏になる。

②身体表現については、男女それぞれの特性を生かすフレーズを歌い、お互いに聴き合うことによって、歌い方に変化が見られた。身体表現を取り入れることによってフレーズの流れやまとまりを感じることができた。

指導事例Ⅱ 歌唱「一人一人が精一杯歌い、豊かな混声合唱の響きをつくろう」第2学年

1 題材設定の理由

最近の中学生は、学校生活の中で、心を揺り動かされるような体験をしたり、何か素晴らしいものに会う喜びを感じたり、目標に向かって努力したりする機会が少なくなっている。

そのような中で、音楽の授業において、生徒が自分の気持ちや心の動きをお互いに受け止め合ったり、音楽的な充実感を味わい、音楽を愛し、感動したりするような体験をもつことは極めて大切なことである。このためには、生徒たちが、音楽の授業に主体的に取り組み、合唱をつくり上げていく喜びや豊かなハーモニーを感じる瞬間を体験することが必要になる。このような体験の繰り返しによって、自己実現が図られ、柔らかな感性が育つものと考え、本題材を設定した。

2 指導目標

- (1) 豊かな響きをもった歌声の出し方や明確で美しい発音の仕方を学習させるなどして、表現の基礎技能を育成する。
- (2) お互いの声をよく聴き合い、全体のハーモニーの響きを感じ合いながら、混声3部合唱の豊かな響きをもつ合唱づくりを目指す。
- (3) 生徒の指揮者・伴奏者が中心となり、生徒自身が主体的に合唱をつくり上げることで、音楽的な充実感や感動を味わう。

3 指導計画（全5時間扱い）

第1時の学習内容

- ・CDの鑑賞により、曲のイメージをもつ。
- ・教師の範唱により、各パートごと音取りをする。
- ・リーダーを中心に、パート練習で音取りをする。

第2時の学習内容

- ・音（休）符の長さに考慮し、正確な音程を取る。
- ・全体練習で、ハーモニー感を体得する。

第3校時の学習内容

- ・それぞれのパートで、一人一人が精一杯歌う。
- ・豊かな響きのある歌声をつくる。
- ・相互評価をし、音楽をつくりあう心を育てる。

第4時の学習内容（本時の展開例）

- ・歌詞の内容を生かし、表情豊かな表現で合唱する。
- ・一人一人が精一杯歌い、生徒たちの意見を取り入れた主体的な合唱をつくる。
- ・豊かで充実した混声合唱の響きをつくり上げる。

第5時の学習内容

- ・曲全体の流れを感じ取り、豊かなハーモニーを味わう。
- ・指揮者・伴奏者を中心に、自分たちの力で、合唱曲の仕上げをする。



4 評価の観点

- ・歌詞の内容や美しい旋律を生かし、表情豊かな表現で歌えたか。
- ・一人一人が精一杯歌い、指揮者・伴奏者と協力して、主体的に合唱をつくろうとする気持ちが育ったか。
- ・混声3部合唱の豊かな響きを味わい、心に感動が残ったか。

5 仮説検証の視点

- ①主体的な活動⇒生徒による指揮の導入をし、自ら音楽を創造する喜びを味わわせる。
- ②豊かな表現 ⇒詩の朗読により、歌詞のもつニュアンス・抑揚を感じ、合唱に生かさせる。
⇒強弱・テンポの工夫など、生徒の意見を取り入れた音楽づくりを意識させる。
- ③感動体験 ⇒豊かなハーモニーが響いたという充実感・満足感を味わわせる。

6 本時の展開（第4時の指導事例）

※○数字は、仮説検証の視点に対応

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
1. 始まりのあいさつをする。 2. 歌うことへの意欲を高める。 ・体ほぐしをする（首・肩・腕・顎・足） ・腹筋の意識運動をする ・4拍子の練習する ・当番の指揮者に合わせて『校歌』を歌う	・リラックスした雰囲気をつくり、歌を歌うための正しい姿勢をつくらせる。 ・上半身は楽に、腹部を使わせる。 ・指揮をすることで、表現する楽しさを味わわせる。 ・発声練習を兼ねて、しっかりと声を出させる。 ・指揮者に合わせて、ブレスをそろえさせる。 ・十分に声を伸ばして、響きを集めさせる。
評価 正しい発声を心掛け、一人一人が伸び伸びと歌うことができたか。	
3. 指揮者に合わせて既習曲『Tomorrow』を歌う。 ① 指揮者を導入し、音楽をつくり上げる（主体的な活動） ・指揮者と伴奏者が前に出て、既習曲『マイバラード』を合唱する	・合唱をするための雰囲気をつくる。 ・unis. なので、自分の声を身体に響かせながらも、みんなで声を合わせ、伸び伸びと歌わせる。 ・指揮者を中心に、生徒たちだけでも、楽しく合唱出来る雰囲気をつくらせる。
評価 指揮をし、自らよい合唱をつくろうとする意識がもてたか。全員集中したか。	
4. 『時の旅人』を混声3部で合唱する。	・正しい音程、リズムで歌えているか注意させる。

5. 今日の課題を確認する。(目標) ・精一杯歌い、指揮者・伴奏者と協力し表現の工夫をして合唱しよう ・歌詞の内容や美しい旋律を生かし、表情豊かな表現で歌おう ・混声3部合唱の豊かな響きを味わおう	・旋律を精一杯歌えているか、またハーモニーが美しく響いているか注意させる。 ・今日はどんな点を注意したらよい合唱に仕上がるか、考えさせる。 ・目標を書いた模造紙を黒板に掲示する。 ・生徒全員に目標を意識付けさせる。
6. オープニングの部分の歌い込みをする。 ③ 豊かなハーモニーの体得 (感動体験)	・豊かな響きで歌い、ハーモニーを感じさせる。 ・ユニゾン、かけあい、ハーモニーを楽しみながら、指揮者とともによりよい合唱をつくろうとする意識をもたせる。 ・全員を指揮に注目させ、みんなの声が響く瞬間を味わわせる。
評価 音楽室に自分たちの合唱が響いた瞬間を味わったか。	
7. ♩=72の部分の歌い込みをする。 ② 言葉の発音に注意 (詩の朗読・歌詞の読み込み) ② 表情豊かな表現の工夫 (強弱と同形反復の工夫を通して、生徒の意見を取り入れた音楽づくり)	・模造紙を見ながら、明確な発音に心掛けさせる。 ・発音のニュアンスを合わさせる。 ・生徒自らが曲の工夫を考え、曲に変化を付けさせる。 ・表情豊かな合唱づくりをさせる。
評価 ・歌詞の発音に注意し、表情豊かな表現で歌えたか。 ・自分たちで主張した表現方法で合唱し、よりよい合唱をつくろうとする意識が高まったか。	
8. 男子の旋律の歌い込みをし、曲の山をつくる。 ③ みんなで合唱していることの喜び (感動体験) ・各パートの自立と曲の頂点を味わう	・男子のメロディを自信をもって歌わせ、前向きな、気持ちのよい響きをつくらせる。 ・他のパートを聴き、音の重なりを感じながら歌わせる。 ・パートのよさを生かす表現の工夫をさせる。
9. 『時の旅人』を通して、合唱する。	・表現の工夫を意識しながら、精一杯、伸び伸びと歌わせる。

③ 混声 3 部合唱の豊かな響きの感得 (感動体験)	・合唱している時に、生徒一人一人が感動できるよう、教師自身が感情を込めて指揮をする。 ・歌い終わった後、余韻に浸れるように、静寂をつくらせる。
評価 ・一人一人が精一杯歌ったか。 ・表情豊かな合唱ができたか。心に感動が残ったか。	
10. 本時の評価・反省、次時の予告をする。	・授業の感想アンケートを自由に記入させる。

7 歌唱指導における評価の工夫

感動体験をするという視点から考えると、授業の最後に総括的な評価をするのではなく、生徒の学習状況に応じて、合唱曲づくりへの意欲を高める形成的評価をすることが必要である。形成的評価に当たっては、特に生徒との信頼関係を築き、教師のきめ細かな注意や励ましにも反応し、次の課題解決への力を付けるようにすることが大切である。また、生徒の自己評価・相互評価もアンケート調査などを通して行い、一人一人が合唱づくりをどうとらえ、どう主体性をはぐくんだかについて、評価することが大切である。なお、その結果は、必ず生徒に還元し、次の段階への目標となるように利用していかななくてはならない。

8 考 察 (○数字は、仮説検証の視点に対応)

- ① 授業の中で、すべての生徒が合唱の指揮を経験することにより、音楽に対してとても前向きな姿勢が見られた。授業の前には、指揮を教え合い、既習曲などは、伴奏者に声を掛け、自ら指揮をしたり、仲間を集め、合唱させたりするなどして、生徒の中に『音楽を創造する楽しさ』が見受けられた。生徒による指揮の導入は、教師主導の授業から、生徒による主体的な音楽づくりの授業へと変化したと考えられる。今後の課題は、指揮の技術の教え方、どの場面で指揮の導入をしたら効果的かである。
- ② 詩の朗読や歌詞の読み込みにより、生徒の表情が明らかに変化した。合唱した際、生徒は歌詞のもつニュアンスや抑揚を深く感じ取り、表情豊かな表現で歌いあげた。特に、模造紙を利用し、授業を展開したことはとても効果的であった。また、同形反復の強弱の工夫を生徒自身に考えさせ、テンポの変化を意識させるなどして、生徒の意見や考えを取り入れた音楽づくりをすると、生き生きとした合唱になる。今後の課題は、生徒の希望や考えを授業へ生かすための、教師の力量の向上である。
- ③ 授業において、感動体験は、生徒たちが授業に懸命に取り組み、豊かなハーモニーが響いたという充実感・満足感から得るものであった。技術よりも、まずは気持ち・感性に訴えるものがある時『今日の音楽の授業はよかった。』と感じる。したがって、生徒自身が、合唱をつくり上げ、全員の気持ちが一緒になって豊かな響きを感じている場面、余韻を感じる瞬間をいかに大切にするかについて、音楽科教師が、1時間の授業の中にそのような場面をどう創造するかが大きな課題である。

指導事例Ⅲ 器楽「自分たちで作る喜びを味わうアンサンブル」第1学年

1 題材設定の理由

最近の傾向として映画やドラマなどで、意外と簡単に感動をしていることが多いようである。しかし、感動を実際に体験してみるという意味では、乏しいものがある。自分自身がその感動の中に入り、心揺さぶられる体験が少ない。そこで器楽における授業で、合奏した時の豊かな響き、一体感、達成感などの体験を通して、感動を味わい、柔軟な心を育てることが大切である。

感動を体験するには受け身ではなく、主体的な活動が必要である。そこで、生徒自身で選曲、楽器編成、簡単な編曲、練習の工夫などに取り組むことによって、作り上げた音楽には一体感、達成感という体験の中から感動を味わうことができる。

このような感動体験が生徒の心の中に、柔らかな感性をはぐくむものと考え、本題材を設定した。

2 指導目標（全7時間扱い）

- (1) 楽器の特徴を理解させる。
- (2) 楽器の演奏テクニック、アンサンブルの基礎を学び、豊かな響きで表現させる。
- (3) 主体的に取り組むことによって、お互いに協力したり、工夫する心を養い、身に付けさせる。

3 指導計画

- 第1時 楽器の特徴、使い方を学習し、楽器編成、選曲を考えアンサンブルのおもしろさを知る。
- 第2時 曲の特徴を理解し、簡単な編曲（ヘッドアレンジ）を試みる。
- 第3時 曲のよさを感じながら練習し、演奏してみる。
- 第4時 お互いの音を聴きながら練習し、演奏してみる。
- 第5時 音のバランスを聴いて合奏を試みる。
- 第6時 前時までの復習をしながら合奏してみる。
- 第7時 お互いに演奏し発表をする。

4 評価の観点

- ・各自の役割を意識しながら、豊かな響きで演奏できたか。
- ・お互いの演奏のよい点、問題点を感じられたか。
- ・工夫しながら意欲的に練習ができたか。

5 仮説検証の視点

① 主体的活動

個人練習、何人かによるグループ練習の中から、いろいろ工夫をし、自分たちで音楽を作り上げていく喜びを感じさせる。

② 公開練習

アンサンブル公開練習で他のグループの演奏を聴いて、豊かな響きに触れ、よりよい演奏のための工夫をし、意欲をもたせる。

6 本時の展開（第5時の指導事例）

※○数字は、仮説検証の視点に対応

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入	・前時の反省をする。 ・反省に基づき、各自の本時の目標を自己評価カードに記入する。 評価 それぞれの目標をしっかりと意識できているか。	・目標が具体的に記入できているかどうか確認する。
展 開	<曲の練習> ① 個人練習 ・自分の苦手な所、できていない所、目標を意識しながら練習する。 ① グループ練習 ・同じグループの数人で合奏したり、練習の補助をするなど、お互いに協力、工夫して練習する。 評価 前時に比べ、個人の上達やグループとしてまとまってきたか。 ② 公開練習 メロディー、リズム、伴奏の役割 ・メロディー、リズム、伴奏の役割を各自意識し、バランスを考えながら1グループずつ合奏し発表する。 ・演奏する前に、グループで工夫した点について発表する。 ・お互いの感想や意見を発表する。 ・楽器の編成 ・曲の始まりなど、音が揃っているか ・強弱 ・バランス 以上を観点に発表する 評価 ・バランスを考え合奏できたか。 ・お互いの演奏を評価することができたか。	・うまく演奏のできない原因、練習のポイントをアドバイスする。 ・前時からの進歩を認め、賞讃する。 ・曲の縦の線やテンポ感などに留意しアドバイスする。 ・リーダーを中心に活動できているかに留意する。 ・演奏する時、聴いている時のポイントを指示しておく。 ・よかった点をなるべく多く言わせるようにする。

ま と め	- 各グループのリーダーが感想と課題を発表する。 - 自己評価カードに本時の評価を記入する。	- 各グループのメンバーが理解しているか確認する。 - 客観的に評価できているか確認する。
	評価 本時の反省、次時への課題を意識できたか。 成果をたしかめる。	本時の評価、次時の予告をする。

7 器楽指導における評価の工夫

音楽の得意な生徒、苦手な生徒など、合奏をするグループの中にそれぞれ個人差がある。グループでの目標に全員が合わせるのは、難しいものが考えられる。そこで、自分に可能な目標をいくつか考えさせ、自己評価をさせる方法を工夫した。本事例においては、自己評価項目を生徒自身が設定することで、授業に対する目標を明確にし、実際に取り組んだ後で自己評価させた。また、授業のまとめにおける自己評価活動と次時への具体的な目標を明確にさせるようにした。こうすることによって、目標が具体的になり、また、練習も主体的に取り組む、意欲をもたせることができる。そして、生徒一人一人に適切な評価をすることができると考えられる。

自己評価カード				
1 年 1 組 2 班・名前 _____				
月 日	目 標（具体的に書く。）	で き た	少 し だ け	で き な い
12/1	全体を通してひけるようにしたい		○	
	でだしを明確にする	○		
12/5	全体を通してひけるようにする	○		
	他の楽器とあわせられるようにする	○		

8 考察（2つの仮説検証の視点から）

① 主体的活動について

グループの編成、楽器編成、選曲、練習の工夫などを自分たちで考えさせ、主体的に取り組ませることによって、意欲的な姿勢が見られた。授業の始まる前より、お互いに積極的に意見を述べたり、練習をしたり、もちろん授業の中でも同様に、自分たちで音楽を作っていくということに興味をもち、仕上がっていく中で喜びを味わっているのが、感じられた。楽譜というものは大切ではあるが、楽譜にこだわらず、新しい発想、工夫、また個人の力量にあったものを選択することが、活動を積極的に展開していく。そこに、今まで自分が経験したことのない、音楽に対する自由で柔軟な心をもつことになる。与えられたものではなく、自ら求めていくことに感動体験があると考えられる。

課題としては、練習の環境、グループの編成をどうしていくかということである。一斉にひとつの音楽室の中で練習をするということは、いろいろな音、曲が入り交じり、音楽をするという環境ではないという点である。また、グループの人数が多いとまとめるべく、少ないと豊かな響きや一体感というものに欠けるものがある。与えられた条件の中で、教師の工夫が問われる点である。

② 公開練習について

仮説検証のもうひとつの視点である、公開練習による相互評価では、お互いの練習状況や、自分たちのグループとは違った楽器編成や選曲に驚きを感じたり、新たな励みになったりしているのがうかがえた。友達の演奏に集中し、思わず拍手が出るなど、そこにはこの授業の中での、演奏者として、聴衆としての感動があったと考えられる。また、最後の発表の授業への意欲と期待が高まった。



課題としては、この授業を全体の何時間目に位置付けるかという点である。練習とはいえ、公開でやるのであまり早い段階では、曲にまとまりがなさすぎてしまい、遅いとせっかくの励みがいかにされず発表の授業になってしまう。グループによっても仕上がりが具合に差があり、何時間目に公開練習をするかを効果的に考えなければならない。

主体的な活動、公開練習による相互評価という授業を通して、生徒に感動体験させるために柔軟で何でも受け入れられる心を育てていかなければならないが、まず、教師自身が柔軟な心をもつことが要求される場所である。

指導事例Ⅳ 鑑賞「楽曲に関する知識や理解を深め、感動的な鑑賞をしよう」第2学年

1 題材設定の理由

ポピュラー音楽を中心に、多くの音楽メディアに囲まれている中学生であるが、クラシック音楽の世界に触れる機会は少なく、授業における鑑賞の果たす役割は大きい。授業では価値あるものとして鑑賞させるが、生徒自身の感性だけでは、その価値を見いだすことができないことが多い。特に絶対音楽では、標題音楽のように音楽以外の何かを表現しているのではなく、作曲者の精神的エネルギーが音自体の構成となって表現されるため、主題が何度も繰り返されることや、際立った変化が少ないことなどから長くて退屈な音楽に感じてしまい、感動とは無縁の鑑賞になることがある。そこで、最初に形式など曲の構造に関する知識や、作曲者の人間性などを理解させて、それを検証する意味で鑑賞することにより、集中力を高めその音楽の表現している何かを感じるきっかけになると考え本題材を設定した。鑑賞による感動体験は、作曲者や演奏者の心に触れた喜びであり、さらに主体的に音楽を受け止める力となるものとする。

2 指導目標

- (1) 交響曲の楽章構成と、ソナタ形式について理解を深める。
- (2) ベートーベンの生きた時代背景と彼の歩んだ人生を知り、作品にこめられた作曲者の心情を想像しながら鑑賞しようとする態度を育てる。
- (3) 演奏者による表現の違いを味わい、クラシック音楽の演奏に対する興味・関心を向上させる。
- (4) ベートーベンとの対比で説明したモーツァルトなど、他の作曲者にも関心をもたせ、主体的に鑑賞して感動を得る。

3 指導計画（全3時間扱い）

- | | |
|---------|--|
| 第1時 | ・交響曲の全体的な楽章構成と第1楽章のソナタ形式を理解する。
・スコアの見方を知り、第1楽章を楽譜を見ながら鑑賞する。 |
| 第2時（本時） | ・作曲者についての理解と曲の構造の知識を深める。
・第3楽章から第4楽章へのクライマックスを鑑賞する。 |
| 第3時 | ・第1楽章、第1主題の動機の変化を中心に全曲の鑑賞をする。
・他の交響曲についても知識を広める。 |

4 評価の観点（本時 第2時）

- ・ベートーベンの生きた時代背景と彼の歩んだ人生への理解を深めたか。
- ・3楽章から4楽章の構造を理解したか。4楽章直前の部分にこめられた作曲者の心情を想像できたか。4楽章での楽器編成の変化と、主題にこめられた気持ちを想像できたか。
- ・演奏者による表現の違いを理解し、クラシック音楽の演奏に対する興味・関心を高めたか。
- ・モーツァルトの音楽へ関心をもったか。
- ・3楽章と4楽章を主体的に鑑賞して、知識・理解に根ざした感動を味わったか。

5 仮説検証の視点

- ① 知識・理解 ⇒ 多様な資料の提示により興味・関心を高め、作曲者と曲の構造に関する知識・理解が深まることにより、想像力が広がり主体的に鑑賞する態度が

養われる。

- ② 興味・関心 ⇒ 指揮者や演奏者の違いによる、個性的な表現を味わうことにより音楽表現に対する興味が湧き、表現活動への工夫にもつながる。

⇒ 作曲家の個性が作品にどのように反映しているか関心をもつ。

- ③ 感動体験 ⇒ 曲の構成や楽器編成の変化を感じながら鑑賞する。

⇒ 作曲者の心情を想像して演奏者の表現を受け止めながら鑑賞する。

6 本時の展開（第2時の指導事例）

※○数字は、仮説検証の視点に対応

学 習 内 容 ・ 学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
・ 前回の復習 交響曲の楽章構成・1楽章のソナタ形式について教科書で確認する。 ・ ベートーベンについて知っていることを発表する。 時代（他の作曲家との関係） 国、作品、生涯	・ TPシートを使い確認する。 ・ 楽章の構成を覚えているか確認する。 ・ ソナタ形式の部分名を覚えているか。 ・ 些細なことでも、発言は大切にします。 ・ TPシートに記入しながらまとめる。 バッハ、シューベルトとの対比を教科書で行なう。
評価 作曲者と曲に関して理解している事を整理できたか。	
①②ベートーベンをキャラクターとして扱った漫画のTPを見る ・ 「雲名警部」（手塚治虫） ・ 「ルードウィヒ・B」（手塚治虫）よりモーツァルトとの出会いの場面 ・ ベートーベン「不滅の恋」より、モーツァルト「アマデウス」より3つの場面を比較しながら視聴する。 1 「少年時代」父親と貴族の前で演奏をする場面 2 「ピアノ協奏曲演奏」大人になり聴衆の前で演奏する場面 ・ ベートーベンの「鼓動」が効果的に使われている事を確認する 3 「葬儀」出棺、埋葬の場面	・ ベートーベンのキャラクターの特徴を簡潔に説明する。 ・ 映画のシーンには事実とフィクションの部分があることを説明する。 ・ 1では音楽家と貴族との関係を説明する。 ・ 2ではベートーベンの演奏が途中で乱れてしまう原因について助言する。 ・ 3ではベートーベンの音楽が多くの民衆に支持されていたことを強調する。
評価 ・ ベートーベンの歩んだ人生とその時代背景を理解したか。 ・ ベートーベンの心情を感じたか。 ・ モーツァルトへの興味・関心が湧いてきたか。	

①第3楽章のスコアをみて音楽の流れを確認する。 - 教科書で3つの主題の旋律を確認する。 - 第4楽章のスコアをみて楽器編成を確認する。 - 第4楽章の第1主題をTPのスコアを見ながら聴く。 - 第3楽章から第4楽章への部分のティンパニーの連打を実際に聴き、どんな感じがするかを発表する。 - ピアノの低音の連打をppからffへのクレッシェンドの演奏を聴く。 - ベートーベンの「鼓動」が使われていた映画の場面をもう一度見る。 ②第3楽章から第4楽章への部分を4種類の演奏をみて、指揮者による表現の違いを確認する。 1 朝日奈隆指揮 大阪フィルハーモニー 2 バーンスタイン指揮 ウィーンフィル ハーモニー 3 カラヤン指揮 ベルリンフィル ハーモニー 4 スイートナー指揮 ドレスデン 国立歌劇場管弦楽団 評価 - 第4楽章直前の部分にこめられた作曲者の心情を想像できたか。 - 作曲者の意図と指揮者の解釈とその表現方法に関心をもったか。	TPのスコアで変化する場面を示し、同時に音も部分的に聴かせる。 - 最大の楽器編成、主題の力強さから第4楽章がこの曲の結論であることを説明。さらに、第3楽章最後の部分が最大のクライマックスであることを強調する。 - 旋律がなくなりティンパニーの連打だけになる事に気付かせ、ベートーベンの鼓動のシーンを思い出させる。 - 不安、絶望から喜び、希望への移行を第3楽章から第4楽章への部分で感じとれるように助言をする。 - 特に第4楽章に入るときの指揮者の動きと顔の表情に注目させる。 - 第4楽章のテンポ設定の違いに気付かせる。
③第3楽章から第4楽章最後までを鑑賞する。 - 小澤征爾指揮 ボストン交響楽団のCDで鑑賞する。 評価 - 曲の構成や楽器編成の変化を感じながら鑑賞できたか。 - 音楽に集中して心が動かされているか。	- 今まで聴いた演奏ではないことを知らせて、演奏に対する興味をもたせる。 - ソナタ形式における部分を示す。

7 鑑賞における評価の視点

曲の構造や形式に関する知識理解については、言葉の意味など確認する意味で尋ねてみるのが有効である。作曲者の心情などのとらえ方は、個人によって違いがあり、映像などから受けた印象や感動を尋ねても、うまく言葉で表現できないこともある。生徒の集中している表情や全体的な雰囲気から、心の動きをつかみ適切な言葉で評価することが大切である。

全曲を聴き終えた段階で、感想を発表したり文章にすることも考えられるが、その場合、各自の表現力の差は感動の深さでなく、言葉や文章における表現能力の影響が大きいことを考慮したい。うまく表現できなくても、大きな感動をもって鑑賞した生徒もいる。

8 考 察

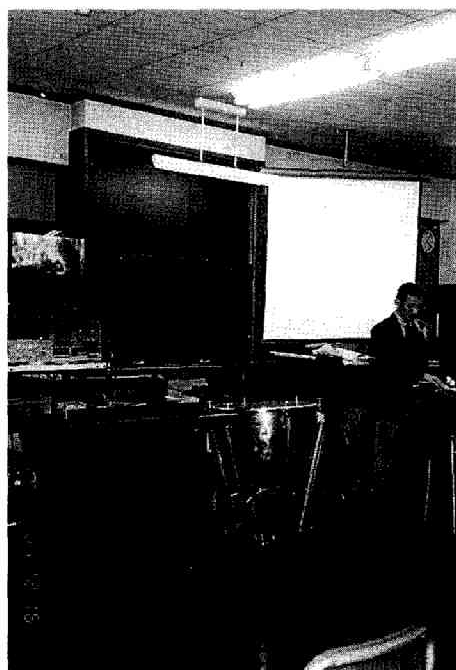
1 学年の鑑賞曲に多い標題音楽に対して、2 学年で鑑賞する「小フーガ」や「交響曲第 5 番」など絶対音楽では「理解する」内容と量に大きな違いがある。特にベートーベンの交響曲第 5 番は、作曲者の心情、音楽の構造・形式など鑑賞に当たって要求される知識が多岐にわたる。ベートーベンについて説明の最初に、生徒たちにとって最も身近なメディアである漫画を使ったことは、集中力を引きだし、興味を湧かせることに効果があった。また、映画のシーンを見せることで作曲者への理解へ導いたのは、短時間で多くの情報を提供できる手段であった。生徒たちのベートーベンに対するイメージ作りには有効であったが、より客観的なとらえ方が可能なソフトの開発が必要である。

感動体験の場を第 3 楽章から第 4 楽章に行く部分に焦点を絞ったことは効果的であった。

また、実際にティンパニーの連打を聞かせた部分と、ピアノで「ジョーズ接近」の音を示すことで曲に対する集中力が増した。スピーカーからの音でない楽器の生の音には力があることを感じさせられた。

同じ部分を 4 種類の演奏で視聴させたことは、クラシック音楽に対するイメージをより柔軟にさせることにつながった。「鑑賞」と「表現」の関連においても指揮者による比較鑑賞の方法は、そのまま合唱や合奏の表現活動の工夫に活かすことができると考えられる。

映像無しで最後の第 3 楽章から第 4 楽章の終わりまで音に集中して聴く活動では、演奏時間が長いため集中力を持続できない生徒も何人かはいた。しかし、もう一度聴いてみたい欲求や、ベートーベンの他の交響曲、更には比較として触れたモーツァルトの音楽を聴いてみたい気持ちが芽生えたならば、柔らかな感性をはぐくむための「感動体験」が得られていると評価できる。



Ⅳ 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

本年度研究員は、心の教育の充実を目指し、音楽科の授業における感動体験の必要性を再確認し、アンケート調査からの生徒の実態を踏まえ、「感動体験を通して柔らかな感性をはぐくむ授業の創造」を主題に設定し、研究を進めてきた。また、感性をはぐくむためには、ジャンルにとらわれることなくより音楽を柔軟に受け入れることによってはぐくまれる感性を「柔らかな感性」ととらえ、柔らかな感性をはぐくむ工夫を全面に打ち出し、仮説検証の視点に立って検証授業を進めてきた。

歌唱の授業では、指揮の導入、歌詞の読み込み、身体表現等を通して、合唱曲における表現の工夫を試み、作詞・作曲者の曲に対するメッセージを生徒に伝えることにより、合唱曲に対する深い理解を生徒に示した。その結果、表現の幅が広がり、生徒の心の中に合唱曲に対する深い共感が生まれ、教師も生徒も深い感動を得ることができた。

器楽の授業では、様々な楽器・曲によるグループ活動の導入、まとめの前段階における公開練習の実施により、生徒の曲をまとめる能力の向上と、曲に対する興味・関心を高めることができ、自発的に音楽に取り組もうという態度がはぐくまれた。

鑑賞の授業では、作曲者への深い理解を得るために、多くの資料の提示と、曲に対する興味・関心を深めるための、様々な演奏の比較鑑賞を行った。その結果、鑑賞曲に対する深い知識理解を得ることができ、「もう一度聴いてみたい」という感想を得ることができた。

このように各学習活動での検証授業を通して、教師の日々の教材研究に裏付けされた工夫により、生徒の感動体験が広がり、柔らかな感性がはぐくまれたものと考察できる。

2 今後の課題

今後の各学習活動の課題の具体例として次のことが挙げられる。

- (1) 歌唱 ・主体的活動から導き出すリーダー、指揮者の育成
・一時間の授業における内容の充実と能率化の工夫
- (2) 器楽 ・演奏技術や生徒の実態に即した効果的な編成、編曲の工夫
- (3) 鑑賞 ・生徒に興味・関心を広げさせるための視点の提供の工夫

全体としては

- (1) 感動できる学校行事（合唱コンクール、卒業式など）での取組みの実践
- (2) 教師側においての多様な資料の収集や提供、授業改善の検討
- (3) 教師間の情報交換の充実
- (4) 題材開発の推進
- (5) 効果的な評価方法の工夫

などが挙げられる。これらの課題を音楽科の教師として、日々研究していくことが今後の音楽教育の充実を実現するために必要である。また、その教師の姿を見た生徒たちが、進んで感動を得るための音楽的な活動を実践することができるようになる。そのような感動体験を通じた活動が、生徒の生涯にわたる財産になることと考えている。